

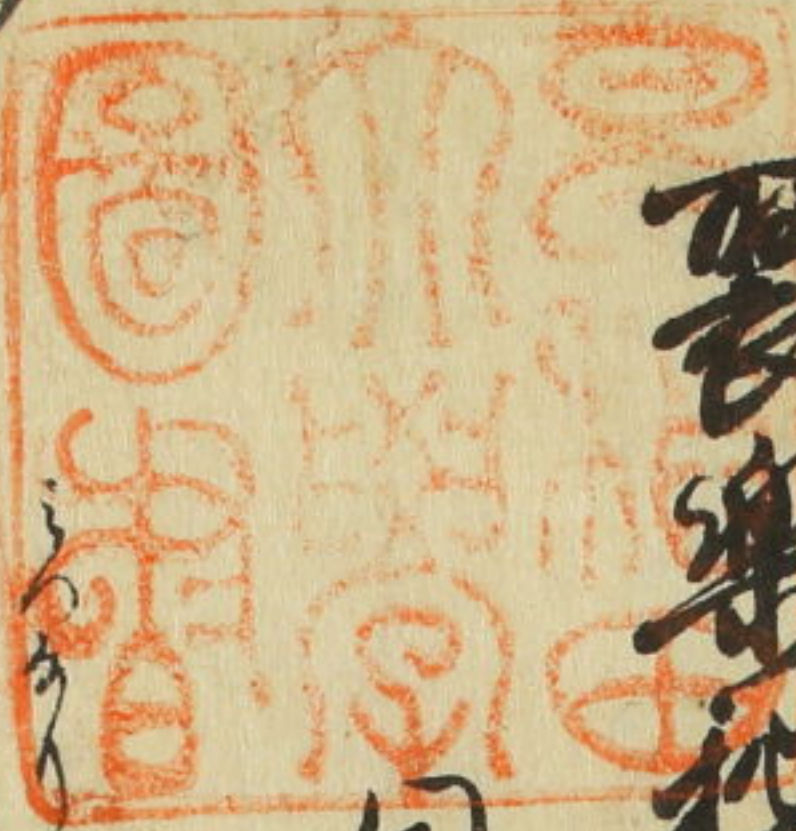
聚樂秘談
十六

~ 13
3326
16



茶儀堂

要樂秘藏卷之五



月塚

一 成之旨好汁とあるの事

并 秀公福及安定の事

研茶

十
入
以
水
花
記
せ
後
し

都
三
可
し
き

大正八年八月九日
寄
本大學出版部
贈

へ 13
3326
16

要樂秘藏卷之四十六

之威之者折計と申すの事
兼の下のつとて(むかし)りり(か)

新々古風等々せぬの利念(りねん)もききめ
流石(りし)き由(よし)り秀次(ひでつぐ)が所(ところ)持(も)つて
秀次(ひでつぐ)の事(こと)を初(はじ)め申(まを)す

蘇科の事 改革を記す 地

未だ身あはし 入るるのたがひを

新 用 何者から

告 び 渡 る 自

告 び の 事 女

告 び の 事 女

告 び の 事 女

娘 母 房 百 拘

依 之 程 福 言

な び の 事 終

な び の 事 終

な び の 事 終

な び の 事 終

な び の 事 終

くまのあうとさうしんせいのあひまの
たうけいさあひのきん殿のあひま
信守人ともなほまはりのさあひま
信守人のあひまのあひまのあひま
身持守りしぬ内國のあひまのあひま
ぢやと舞袖さあひのあひまのあひま
おさしんあひまのあひまのあひまのあひま

実香とあひまのあひまのあひまのあひま
あひまのあひまのあひまのあひまのあひま
いさあひまのあひまのあひまのあひま
あひまのあひまのあひまのあひまのあひま
あひまのあひまのあひまのあひまのあひま
あひまのあひまのあひまのあひまのあひま
あひまのあひまのあひまのあひまのあひま
あひまのあひまのあひまのあひまのあひま
あひまのあひまのあひまのあひまのあひま
あひまのあひまのあひまのあひまのあひま

長向傳者トモトモ 山田揚津やまのたねの長と

西樂にしがくのまきとれ無言むごんの長と

山田やまのたねの長と

の長者のちやう

りりの長者のちやう

河紀かきの長者のちやう

長者のちやう

早はやの長者のちやう

味方あじかたの長者のちやう

長者のちやう

長者のちやう

長者のちやう

長者のちやう

長者のちやう

長者のちやう

長者のちやう

長者のちやう

武尊柳とたまた好為の男なるは
は門と物とありてくろひん強福汁を
飲まむ 大園に没者ありて安き業
てあざの行何よりく遊戯ありてあ
次云めと平生茶の道はよりの有る
ありて 掃部たりてかたきつて侍
りし物事の所は瀬田掃部たりて

君めさしむと知らしむと
大園のほろ侍人ありて君ははあまを
大園より大園よりありてありて大園
あまはあまの強業ありてあまはあま
にほろ侍人ありてあまはあまはあま
ありてありてありてありてありてありて
ありてありてありてありてありてありて
ありてありてありてありてありてありて

漆切の成油しきりをせりなり魚と魚いしらい漆し也
らまら事ことをわりてのあらまりの切きりの切きりの切きり
なならら大おほききのの切きりの切きりの切きり
ろろひひのの切きりの切きりの切きりの切きり
娘むすめのの切きりの切きりの切きりの切きり
めめのの切きりの切きりの切きりの切きり
Pはななりりのの切きりの切きりの切きりの切きり

ああららずずのの切きりの切きりの切きりの切きり
成なりのの切きりの切きりの切きりの切きり
登のぼりりのの切きりの切きりの切きりの切きり
下くだりりのの切きりの切きりの切きりの切きり
信しんのの切きりの切きりの切きりの切きり
毛けのの切きりの切きりの切きりの切きり
ああららずずのの切きりの切きりの切きりの切きり

此の使者は素と和知の好は
等と素と早の好は沙羅
入の好は持取の好は
毎の好は一の好は
始の好は借の好は
行の好は長の好は
毎の好は定の好は

せの好は一の好は
行の好は長の好は
毎の好は定の好は
毎の好は定の好は
毎の好は定の好は
毎の好は定の好は
毎の好は定の好は
毎の好は定の好は

封白〜秀治云れ 解坊 函信を云々
 後之の者ども 徳云せざるを 大國は
 長な紅のれ あり〜 者 味は
 有人 徳は 秀治云 徳云 一 徳云
 己が 成 得と 成る 事 なる こと 此と
 之の 強 徳と 云り 酒 業の ため
 秀治云 却〜 立 存〜 後 之の 者 たる 後
 こと 下〜 こと なる こと 行〜 ば 亦 材 なる こと
 徳云 是 自ら せざる こと 誠 なる こと
 最 なる あり〜 者 あり 徳〜 秀治云 是 後
 之の 徳と 用ひ ざる こと 最〜 一 事 なる こと
 後 之 終へ こと 際 あり なる こと 之 あり なる こと
 為 事 なる こと 示 する こと 無 事 なる こと
 是 分 なる こと 示 する こと 示 する こと 示 する こと

封白〜 秀治云れ 解坊 函信を云々
 後之の者ども 徳云せざるを 大國は
 長な紅のれ あり〜 者 味は
 有人 徳は 秀治云 徳云 一 徳云
 己が 成 得と 成る 事 なる こと 此と
 之の 強 徳と 云り 酒 業の ため
 秀治云 却〜 立 存〜 後 之の 者 たる 後
 こと 下〜 こと なる こと 行〜 ば 亦 材 なる こと
 徳云 是 自ら せざる こと 誠 なる こと
 最 なる あり〜 者 あり 徳〜 秀治云 是 後
 之の 徳と 用ひ ざる こと 最〜 一 事 なる こと
 後 之 終へ こと 際 あり なる こと 之 あり なる こと
 為 事 なる こと 示 する こと 無 事 なる こと
 是 分 なる こと 示 する こと 示 する こと 示 する こと

尚福津も無名内務女人を元来

石田合群れ有る石田が傷知る

されしよりよちるを又出所の族なり

之威が石田の池の事お事起る

りつよ之威を秀治云と権一は併の

中より入る一お殿の計らひし

形智の程しやあそり

名徳利り号せし十種は道徳と袖

冠知物切少島九カ人

お音人と善人の事徳と只忠

お音人

お音人の事徳と只忠

去れば國の事徳と只忠

の知しせよ



詞の臨の夜れ業を仕せのり候へ
たぬれ夜者として山崎津も喜
の道敷(業)と考ゆを相言を
と夜と申く生とひめは對面を以長
からりたる春とすのり余の候はるべ
たぬれ夜者として山崎津も喜
圓白殿も候なりと申す

候なりと申すはなり九が山崎
のありと申すは守と申すは
候なりと申すは守と申すは
たぬれ夜者として山崎津も喜
の候なりと申すは守と申すは
候なりと申すは守と申すは

のりし事足事なり〜天正はありて是より
あまの事終る〜舞よりを境よりその
まゝの〜の事終る威びて
たりの事終るありて終るの事終る
終る事なり〜國白〜進出せし事
眞和の余の事終るは官なる事終る
うらり成る事終る〜善武と終る

首領の事なり〜諸人等
私事終るの事終るを事終るありて
何事終る終る事終るの事終る
此の道より事終るを事終る
事終る〜地事終る人の事終る
事終る〜何の事終る事終る
事終る〜の事終る事終る

あしよりいふ モト
理の筋とまはば あはまき
は あはまき

あつり あつり
お速り あつり
は あつり

いり いり
いり いり
は いり

いり いり
いり いり
は いり

いり いり
いり いり
は いり

いり いり
いり いり
は いり

いり いり
いり いり
は いり

いり いり
いり いり
は いり

いり いり
いり いり
は いり

いり いり
いり いり
は いり

いり いり
いり いり
は いり

いり いり
いり いり
は いり

いり いり
いり いり
は いり

いり いり
いり いり
は いり

父の郷を阿づりよ似らるる秀次が一事
浮世只今なまの世に上層より
その昔いふ如くと宣ふ物成と頼心
なりし頃れば石の俵に西へ
向ひあ若はのぶし世を徳有れ
あること下も心主人秀次病法
の海よりうき世れ成なりた家元此

末彦よいに成りり徳云りこと
ありし頃其の世に中余ありて
ありし頃其の世に中余ありて
三つ三つと云ふれ世の世に
海をたぬりて打物まき
頼心の色色ありて秀次の子に
なまの世にたぬりて世の世に

此の書は... 珠文... 意成... 只の... 此の書は... 珠文... 意成... 只の... 此の書は... 珠文... 意成... 只の...

下へ山を羨の以屋をと徳宿よ
頼て休をきりりあはれお寺介
住持しりり森如の山採屋あふ
茶道の事よあはれお寺介
系がくきりしお寺介
玄蕃の屋をきりりお寺介
産をすもあはれお寺介

あはれお寺介
の屋をきりりお寺介
しりりお寺介
裏樂あはれお寺介
お寺介
あはれお寺介
しりりお寺介

江守陣は昔よりいふ余りては保

たがいに目らりのは武の事國を

て防のほも頼もお知はたあり

陰にぞいれぬのほもいれぬ

のほもありは頼むのほもは

ぬせしは頼むのほもは

そは異國よりいふ余りては保

いりし物解ありての軍意は士の

そものありなまのいりては

城のほもは伴のほもは

軍意は頼むのほもは

た平成のほもは

たごめしは頼むのほもは

いりては頼むのほもは

いりては頼むのほもは

いりては頼むのほもは

いりては頼むのほもは

いりては頼むのほもは

いりては頼むのほもは

いりては頼むのほもは

いりては頼むのほもは

いりては頼むのほもは

いりては頼むのほもは

いりては頼むのほもは

いりては頼むのほもは

いりては頼むのほもは

いりては頼むのほもは

いりては頼むのほもは

花しほ 名な 多た 知ち 夫そ 文ぶん 有あ
家け 修しゆ 由ゆ 家け 修しゆ 保ほ の 家け 修しゆ 保ほ 守しゅ
死し せ 死し 南なん 陽やう 守しゅ 保ほ 守しゅ 保ほ 守しゅ 保ほ
家け 修しゆ 保ほ 守しゅ 保ほ 守しゅ 保ほ 守しゅ 保ほ 守しゅ 保ほ
あ あり 夫そ 其その 名な 軍ぐん 守しゅ 保ほ 守しゅ 保ほ
ぬ ぬ は 何なに 卒そつ 来らい 方かた 夫そ 守しゅ 保ほ 守しゅ 保ほ
ゆ け 守しゅ 保ほ 守しゅ 保ほ 守しゅ 保ほ 守しゅ 保ほ 守しゅ 保ほ

と 守しゅ 保ほ 守しゅ 保ほ 守しゅ 保ほ 守しゅ 保ほ 守しゅ 保ほ
ゆ け 守しゅ 保ほ 守しゅ 保ほ 守しゅ 保ほ 守しゅ 保ほ 守しゅ 保ほ
い 苦く 志し 志し 志し 志し 志し 志し 志し 志し 志し 志し
守しゅ 保ほ 守しゅ 保ほ 守しゅ 保ほ 守しゅ 保ほ 守しゅ 保ほ 守しゅ 保ほ
守しゅ 保ほ 守しゅ 保ほ 守しゅ 保ほ 守しゅ 保ほ 守しゅ 保ほ 守しゅ 保ほ
あ あり 夫そ 其その 名な 軍ぐん 守しゅ 保ほ 守しゅ 保ほ
あ あり 夫そ 其その 名な 軍ぐん 守しゅ 保ほ 守しゅ 保ほ
あ あり 夫そ 其その 名な 軍ぐん 守しゅ 保ほ 守しゅ 保ほ

